

夕霧の巻 私見

(その二)

久保重

(一)

夕霧が思いを寄せている落葉の宮は、亡母一条御息所の七七日の後、出家を思い立つ。宮が内親王らしく気高く独身生活を貫くことは、亡き母の素志であり、また宮自身も以前から志望するところであった。一方、父君朱雀院は宮に出家を思い止まらせようとして書簡を送る。その書簡の初めの部分について、私は諸説と異なった解釈を試みたいと思う。先ず本文を掲げる。

宮はかくて住み果てなむと思し立つ事ありけれど、院に人の漏し奏しければ、「いとあるまじき事なり。げにあまととざまかうざまに、身をもてなし給ふべき事にもあらねど、後見なき人なむ、なかなか然るさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましきとき、この世後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。ここにかく世を棄てたるに、三の宮の同じごと身をやつし給へる、末なきやうに人の思ひ云ふも、棄てたる身には思ひなやむべきにはあらねど、必ずさし

も、やうのことと、あらそひ給はむもうたてあるべし。世の憂きにつけて厭ふは、なかなか人わろきわざなり。心と思ひとるかたありて、今すこし思ひしづめ、心すましてこそ、ともかうも」と度々聞え給うけり。この浮きたる御名をぞ聞召したるべき。さやうの事の思はずなるにつけて倦じ給へると、言はれ給はむことを、思すなりけり。さりとてまたあらはれてものし給はむもあははしう、心づきなき事と思しながら、はづかしと思さむもいとほしきを、何かはわれさへ聞きあつかはむと思してなむ、この筋はかけても聞え給はざりける。(日本古典全書「源氏物語」——以下同じ)

右の傍線部分について、吉沢義則氏は「成程幾人も夫をもつといふ事は感心した事でもないが、誰も世話してくれる人もない若い女が、尼になって却って浮名を立てて罪を作る時は、現世後生共に中途半端で、世間の非難を蒙るものだ」(対校源氏物語新釈)、池田亀鑑氏は「成程幾人も夫をもたれる事はよくないが、世話をする人のない女が出家などして却って浮名を立て、罪を作る時は、此の世でも

あの世でも中途半端で世間の非難を受けるものだ」(古典全書源氏物語)、山岸徳平氏は「落葉宮が出家を考える様に」なる程、又、夫を持って(柏木の後に夕霧に靡いて)、色々(あまた)とやかやくと、今更に人妻となって身を取り扱いなさるべき事でもないけれども、誰と云って、世話してくれる人のない者が、いかにも、なまなか、そんな尼の状態になっていて、却ってあつてはいけな浮名がまあ立ち、罪を得(作)るような場合は、現世でも安穩でなく、後世でも浄土往生できず、どちらも中途半端で、世間の人に非難せられる欠点を蒙る事である。」(日本文学大系源氏物語四)、玉上琢弥氏は「いかにも一人ならずの男に、再婚をなさるのはしてはならない事ですが、世話をする人がいない女は、かえって出家した形で、許されない浮き名を流し、罪を作るときは、現世も来世も、どっちつかずで非難される失敗をおかすものだ。」(源氏物語評釈第八巻)と訳して居られ、院が、宮の出家後の身の上を案じていると解して居られる。夙に、「玉の小櫛補遺」も「是はただ大方にのたまへる也。夕霧の事をのたまふといふ説はわろし。夕霧の事は、下に、このすぢはかけても聞え給はざりけりとあるをや。」と解しているが、私は本文の傍線部分の最後の「なる」を伝聞の意に解して、「後見のない女が、出家した後浮き名が立ち、仏に対して罪を作る時は、現世でも後世でも中途半端で非難される過ちをおかす——その様な事例を聞いている。」と解しては如何かと思う。院が夕霧の事に触れないで戒告したという点を重視して、「なる」を伝聞と解して院が世間周知の事実例を以って宮の早やまった出家を禁

じたと見る方が、この場合には適当なのではないかと思うのである。一般論というものは当人のことを云う場合の一種の婉曲表現として受け取られ易い性質を持っている。「なり」を断定と解する時は、如何に一般的に云われていても、夕霧との噂を念頭において院が云っているのだと、落葉宮に受け取られるであろうことは、われわれが見ても想像に難くない。院は噂を耳にしていることを宮に隠しておきたいのである。出家を内心で志望している時点に在る内気な内親王に、いきなり愛欲による破戒の危険を警告するというのは、何としても唐突であるし、また、相手の羞恥心を無視するも甚しい。やさしい人としてこの物語に描かれて来た朱雀院その人の繊細優雅な神経は、なまなか噂を知っているだけに却って、宮と夕霧との間に生じる危機を先き廻りして取り上げた風に誤解されるおそれのある言葉を使うことに、耐えられまい。地の文が、夕霧の事は「かけ、でも聞え給はざりける」というのは、その所であろう。院の真の目的は、宮が世間の誤解を招くのを避けるために、この際の出家を抑止するのにあった。そこで、誰か第三者の軽率な出家に基づく失敗の例を挙げて、宮が一時の感情に駆られて出家をすることがない様にと諭したのだと解した方が自然なのではなからうか。この解釈を採ると、従来の解釈において書簡末尾の「心と思ひとる方ありて、今すこし思ひしづめ、心すましてこそ、ともかうも」との続き具合に存在した前後の不一致や矛盾が解消する。「今はいけないが、今後、真に無常を悟る所があって、出家を望むなら、反対はしない。」と受け取れるからだ。また、「いとあるまじき事なり」は

「この際、出家を思い立つとはとてもないことだ。」と解釈すれば、冒頭との間の続き具合も不自然でない。斯くして、問題の「なる」を伝聞と解した方が、書簡全体の意味のまとまりがよくなり一貫性が生じる。地の文によると、この書簡の文章は、数通の書簡を要約したものと解されるが、それはそれなりに、矢張り全文に一貫性があるべきであろう。なお、河内本のこの部分は

「げにまたとさまかうさまに身をもてなし給ふべき事にはあらねど後見なき人なむ、なか／＼さるさまにて、あるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世後の世、中空に見ゆるもどきあり」

とあって、院が、具体的実例を挙げて、後見のない点では同じ身の上の落葉宮に、注意を与えていると読むことが出来る。

(11)

以上のように解した場合、院の念頭にある先例とは何であろうか。われわれの頭に浮ぶのは、一条帝の皇后藤原定子の出家と還俗である。

長徳二年（九九六）正月二六日、中宮定子^{（定子）}の兄内大臣藤原伊周、権中納言隆家兄弟の従者が花山法皇を射た事件があり、次いで四月一日、法琳寺が伊周の太元帥法を修することを奏上した。四月二四日、罪によって内大臣伊周は太宰権帥に権中納言隆家は出雲権守に貶せられた。中宮は宮中から二条宮に退出。五月一日隆家は中宮御所に於いて捕えられて配所に出発、伊周は逃亡。四日、伊周も捕えられて配所に出発、母貴子は出家した。このため定子が落飾したの

は周知のところである。定子皇后の出家及びその後の動静に関する記事を諸書から摘出すると次の通りである。

日本紀略

- 長徳二、五、一（略）今日。皇后定子落飾為尼。
 “ “ 六、八 今夜東三条院東町世号二条宮焼亡。仍中宮此
 間御座今夕火事。渡御亮高階明順宅。
 “ “ 一二、一六 中宮誕生皇女。^{（定子）}出家之後云々。
 長徳三、六、二二 天皇行幸東三条院。中宮参職曹司。
 長保元、八、九 中宮自職曹司移御前但馬守平生昌宅。
 “ “ 一一、六 寅刻中宮御産皇子。敦康親王也。」今日。以
 從三位彰子為女御。
 長保二、二、一二 中宮入内。」今日。一宮敦康親王蒙可駕牛車
 出入禁中之宣旨。
 “ “ 二、二五 以女御從三位藤原朝臣彰子為皇后。^{（号之。即中宮。）}
 “ “ 三、二七 任宮司以元中宮職為皇后宮職。
 “ “ 八、八 皇后宮出御散位平生昌朝臣宅。
 “ “ 八、二七 皇后宮自生昌朝臣宅入御内裏。
 “ “ 一二、一五 皇后宮還御本宮。
 “ “ 今日皇后宮定子於前但馬守平生昌朝臣宅。有
 御産事。皇女孌子。
 “ “ 一二、一六 皇后崩給。^{（年廿五。在位十一年。）}

(百 鍊 抄)

長徳二、五、一 (略) 今日中宮出家為尼。中宮定子依帥事出家。六月廿二日入内。人以不甘心。

長保二、一二、一六 皇后宮定子依産事崩。天下心 喪服

(小 右 記)

長徳二、五、二 (略) 又云后昨日出家給云々、事頗似実者、

〃 〃 六、九 今晚中宮焼亡、(略) 次參中宮御在所明順朝臣二条宅

(略) 或説曰、后宮不同車、被抱付男等、先

渡給二經法師宅、自彼宅乘車、移給明順朝臣宅、(略)

長徳三、二、一〇 昨日今上女二親王(餘子)五十日彼親王四日夜被參女

院、餅聞召、即歸給、(略)

〃 〃 六、二三 西刻幸女院依御惱重、推 刻 限年二刻許也 (略) 晚頭還御、

今夜中宮參給職宮司、天下不甘心、彼宮人稱不出家給云々、太希有事也、外記令申可慮從

行啓之由、然而不候、行啓事戸部承行

長保元、八、七 中宮以左近中将頼定被仰云、九日可出里第、

而公家為仰其事、召遣上卿、悉申故障不參入

(略)

〃 〃 八、九 (略) 今日中宮可出御里第、而無上卿、只

今不召仰供奉行啓之所司者、左府弘曉引率人

々、向宇治家、自六条左府後家手、買領地也、今夜可渡彼家

云々、似妨行啓事、上達部有所憚、不參内

歟、申剋許有急速召、仍參入、頭弁仰云、依

中宮可出里第事、所召之、也力而助所勞早參、最

有勤、但中納言藤原朝臣光時參入、仍仰事由先

了者、依力歟退出、

〃 〃 八、一六 慶律師立乍来、依穢不着座、相語云、自明日

可奉仕中宮御修法、ケ日、依内仰之、

〃 〃 一一、七 卯刻中宮産男子、前但馬守生 昌三条宅 (略) 主上以右近

中将成信、被奉御劔於中宮、

(権 記)

長保元、八、九 中宮行啓前但馬守生昌、

長保二、一二、一六 皇后諱定子、前関白正二位藤原朝臣長女、母

高階氏、(略) 長徳三、(三)年有事出家、其後還

俗、所生皇子都廬三ヶ、敦康、脩子、又新生

女皇子也、立十一年崩、年廿四、

(榮 華 物 語)

長徳二年四月廿四日なりけり。(伊題)帥殿は筑紫の方なれば、未申の方

におはします。(傳多)中納言は出雲の方なれば、丹波の方の道よりとて、

戌亥さまにおはする。御車共引き出づるまゝに、(榮)宮は御缺して御手

づから尼にならせ給ぬ。(糸也)内には、「この人くまかりぬ。宮は尼に

ならせ給ぬ」と奏すれば、「あはれ、宮はたゞにもおはしませざらむに、物をかく思はせ奉ること」、覺し続けて、涙こぼれさせ給へば、忍びさせ給。「昔の長恨哥の物語も、かやうなることにや」と、悲しう覺しめさる事限なし。(略)

宮の御前の内参の事、その^(成忠)のかし啓しつるにぞ覺した、せ給へる。明順・道順萬にそゝき奉る。(略)宮^(倫子)おはしますたびなればよろづ御けはみ異なり。御輿などは古体に有べき事なれば、「御車にて」とぞ覺しめしたる。いとくつしましう宮^(倫子)おはしめしたれど、「などてか。猶諸共に」と聞えさせ給へば、彼二位のそゝのかし聞えし事もあれば、さばとて諸共に参らせ給。人の(くち)やすかるまじう思へり。かくて内に参らせ給夜は、大殿^(道長)、さるべき御前参るべきよし仰らるれば、皆参りたり。(略)宮萬につゝましき事を覺しめすに、院^(定家院)と御対面ありて、尽きせぬ御物語を申させ給程に、上渡らせ給ひて若宮見奉らせ給。(略)さて宮に御対面あるに、御凡帳引寄せていとけ遠くもてなしきこえ給へる程も理なれど、御殿油遠くとりなして、隔なき様にて泣きみ笑み聞えさせ給ふに、古に猶たちかへる御心の出でくれば、宮「いとくけしからぬ事なり」など、萬に申させ給へど、それをも聞しめし入れぬ様に乱させ給程も、かたはらいいたげ也。萬に語らひ聞え給て、暁に出でさせ給べけれど、「猶しばし。宮^(倫子)見つくまで、今四五日は」と申させ給て、職の御曹司に曉渡らせ給て、そこにしばしおはしますべくしつらはせ給。上も宮も萬におぼしめしはざる事多くおはしませど、ひたみに只哀に恋しう思ひ聞えさせ給へる程なれば、人のそしらむも

知らぬさまにもてなし聞えさせ給も、此方はずちなき事にこそあれ。宮の御前は、世のかたはらいいたさをさへ、物歎きに添へて覺しめす。御方の女房達、昔覺えて哀に思たり。さて日比おはしまして、猶いと程遠しとて近殿に渡し奉りて、上らせ給事はなくて、我おはしまして、夜中斗におはしまして、後夜に帰らせ給ける。御心ざし昔にこよなげ也。此比候給女御達の御覺いかなるにかと見えさせ給。疾く出させ給べかりけるを、「猶しばし」との給はせける程に、二月ばかりおはします程に、御心地悪しうおぼされて、例せさせ給事もなければ、「いかなるにか」と胸つぶれて覺さるべし。上かくと聞せ給ふにも、まづ哀なる契を覺し知せ給。かへすくもかくてあるべかりける御有様を、かくいさかなることどもを、世人もききにく、申、我御心地にも萬に夢の世とのみおぼしたどらるべし。(浦く)の別——日本文学大系「栄花物語 上」)

栄花物語は、定子出家の日付に錯誤があり、定子参内に道長が協力したということは、小右記の記載(長保元、八、九)との間に大差があつて信じ難く、定子・脩子と東三条院の対面の情景は紀略・小右記の記事と矛盾する。帝と定子との対面の場面にも、作者の想像力が加わっていないとは断定出来ない。これらも周知のところである。

さて、以上の諸記録の記すところによって、われわれは皇后定子の衝撃的な出家と還俗との史実性を確認し得た。出家後から死去に至るまでの定子の経歴は、その出家が一時の感動に発した軽率であつたことを充分に物語っている。同時にまたその出家及び還俗の過誤の責めは定子ひとりの負うべき種類のものではなかつたことを物

語っている。然し世評は定子に酷であった。

権記の長保二年正月廿八日の条に次の記事が見える。

「(略) 此事去冬之末、太后崩給以來、度々催奏其旨、當時所坐藤氏后、東三条院、皇后宮、中宮皆依出家、無勤氏祀、職納之物可充、神事已有其數、然而入道之後、不勤其事、雖帶后位、雖有納物、如戸禄素養之臣、徒資私用、空費公物、論之朝政、未有何益、度々依怙、所司卜申神事違例之由、疑慮所至、恐在如此之漸歟、(略) 我朝神國也、以神事可為先也、中宮雖為正妃、已被出家入道、不勤神事、依有殊私之恩、無止職号、全納封戸也、重立妃為后、令掌氏祭可宜歟、(略)」

記事は彰子立后を必要とする理由として、藤氏出身の三后みな出家して氏の祀を勤めないことを難じる奏上が度々あったと云うものである。詮子・遵子は先帝の未亡人でいわば隠居の身であるから、現役の中宮の地位にある定子に特に風当たりが強い。と云うより實際は定子一人に非難の刃が向けられているのである。定子出家は長徳二年(九九六)五月一日、還俗は同三年(九九七)六月二日、その後長保元年(九九九)に第一皇子敦康親王を懷妊・出産しているのであるが、長保二年(一〇〇〇)に至っても朝廷の表向きでは中宮の出家入道を云い立てて、「雖帶后位、雖有納物、徒費私用、空費公物」と見なし、「(帝の)依有殊私之恩、無止職号、全納封戸也」と貶められた。定子はこの年の十二月十六日に崩じた。死に至るまで中空の咎めを負わせられ、過誤の追求を緩められなかったのである。われわれはその出家に於いて、還俗に於いて、定子のやさ

しく女らしい、多感さに感動せずにはいられない。凄じい政争の嵐の中で、出家と還俗の両方を責められながら生きてきたその晩年は、多くの心ある人の同情を誘ったことと思われる。また定子を見捨てなかった一条帝が「殊私之恩」によって、中宮の職号を停止せず封戸を全く元のままに存続していると暗に非難されるのを不当と見た人も少なくなかったであろう。これらの悲劇的事情は人々の記憶にながく残っていたことであろう。これだけの素材に同時代に生きた作者が制作意慾をそそられないなら、その方がむしろ不思議である。然し定子を踏まえて書かれたことを立証する何ら具体的記述がないではないか、という反論に対して、定子はその最も純粹な結晶の形で夕霧の巻の中に描かれたのだと私は答えたい。

(三)

朱雀院が定子皇后の出家・還俗を念頭において消息文を書いたというところ、しかもそれが唐突に持ち出されたということは、作者が、物語の進行のこの時点で、読者が定子を想起することを期待したのだと私には思われるのである。また、仔細に見て行くと作者が、定子を連想させるための細心の布石を打っているのが目につく。まず一条の御息所には、定子の母貴子の片鱗が影を投じていると見ることが出来る。一致点を拾うと次の通りである。

貴子

一条御息所

身分 円融帝に仕えた掌侍。

朱雀院に仕えた更衣。

才 能 漢学をよくし、和哥は、音楽・和歌に長じ、才気あ

後拾遺・新古今の作者。

り。

氣質 古体の人（大鏡）、宮の 古体の人、重態の身で宮に

御前で裳を着用（枕草子）

臣礼をとる。

母子関係 定子を誇りとする、母子 宮が唯一の誇、母子の仲緊

の仲緊密。

密。

死の時期 定子の重大時期。

宮の危機。

また、貴子の兄高二位成忠は、尊卑分脈によると大和守であったことが記されている。落葉宮は、母の甥大和守が唯一の後見で、宮に夕霧の意に従う様強意見をし、一条宮帰邸後も夕霧との仲を取りもつことに力を入れて世話をする。栄華物語では高二位が定子に参内還俗を説得する。栄華物語の記事を史実と見るのは危険であるし、栄花の方が源氏物語の影響下にあることも考えられるが、落葉宮の後見はどここの国守でもよいのに大和守を選んだ点に、意味がありそうである。こうした細部の相似は、女主人公の像に定子を印象づける効果を生じる。さて、作者はなぜ定子を想い出させたのであろう。私はこれを源氏物語の作者の屢々用いる手法の種明かしだと解したい。朱雀院の書簡を境にして、この後の落葉宮には定子皇后によって書く部分があることを読者に暗示しているのだと解したい。

う。 次に落葉宮に定子が投影していると見られる個所を拾い上げよう。

大和守の強引な説得にあって、落葉宮は泣く泣く帰京する。荷物はすでに送られてしまったので、ひとり小野に留まるべくもない。鉄の類はとり隠して宮が自ら髪を切らない様に側近が監視している。半ば自棄的な反抗心から宮は出家を断念して迎えの車に乗る。帰りついた一条宮は、もはやわが身一人の心安らかなふるさどでない、隅々まで今を時めく夕霧大将の息のかかった盛大な邸。大和守は勿論腹心の少将まで、女房という女房は悉く夕霧の味方と化して、それが宮への忠だと思い込んでいる。夕霧を避けて宮はやっと塗籠に隠れる。その塗籠の内も、一日二日経ると取り片付けられて一般の部屋と大差なく整えられ、遂に少将が手引きして夕霧を導き入れる。抵抗しても抵抗しても所詮勝ち目がないのを知っていて、しかもわが心一つを頼みにして拒み通そうとする宮の孤独な一途な心情を作者は描いている。それは作者の創作にかかると、定子の場合とは事情を全く異にする。定子には、出家の身という立場の顧慮の外に、父関白没後の一門の衰運を挽回する要の位置にいる意識がある、伊周・隆家の赦免を帝に懇願したい、周囲のすすめの通り皇子を産み得れば亡き父母の霊を満足させることが出来ようという望みも動く。この度出生した皇女の将来の幸福を計らねば母として申し訳がない。それに何よりも一条帝とは相愛の閨柄であり、出家後も中宮の身分と封戸とを旧のまま存続して貰っている恩義がある。次々と女を入内させる政敵に対する対抗意識も働いたであろう。多様な複雑な人間関係ががんに捌みに噛み合っている。落葉宮の純粹・可憐・単純・一途な結婚拒否とは大きな懸隔がある。しか

し、定子が後見を喪った身の寄る辺なきをひしひしと感じた心情、出家の身で一条帝の愛をそのまま受け入れては、仏に、この世のおきてに、すまないと思った心情を結晶させると、この二人―後見のない定子と後見のない落葉宮が、心の中で経験したのものには深い相似があると思われる。落葉宮という女主人公がその心情によってのみ描かれている点に注目したい。また結婚の経験がある人として落葉宮が設定されている点も注目したい。先き先きどうなるか見通しがつくに乗車するしか仕方なかった落葉宮には、脩子に同乗して職曹司に入る六月二日夜の定子の心情が、荷物を先きに送られて一人留ることが出来なくなった落葉宮の描写には、小右記の記している二条宮焼亡の夜、明順宅に移ることを拒んで男等に抱えられて車に乗せられる際に定子の感じたであろうおそれが、移入されているのではなからうか。塗籠に逃れて、ひとり内親王不再嫁のおきてを死守しようとする落葉宮、その悲願が最終的には敗れてしまった後の、宮の拍子抜けのした様な変な安堵感、私はそこに原型として潜在する定子を感じる。落葉宮は定子その人を投影したのではなく、定子の孤独で純粋な魂を集約的に移入して、新たな別個の形象を創造したと見るものであるが、その集約のし方に、私はこの物語の作者の、作家としての工夫を見、その工夫を生むに至った根柢に在る作家的人間愛を発見するものである。定子の還俗を素材として取り上げるに際して、定子その人はすでに故人であったが、この物語の執筆当時、事件関係者―一条帝をはじめ敦康親王・脩子・嬉子・内親王・定子の親族達が在世中であったので、定子を具体像とし

て描けなかったという社会的理由も勿論あるが、作者が定子の最も美しい最も感動的な部分を選んだ功労を何よりも大きく買うべきである。この方法は作者以前には無かった。またこの方法だけが、定子の苦悩の美しさとあはれさを描き得た。定子の心情をかくの如く理解したのは作者の独創である。定子還俗という一個の素材をこの様に独創的に理解することによって、この作品を生んだ能力は、またその根柢に存在する人間愛そのものをも見せている。而かも、その人間愛の精神は、理性的批判を埋没する種類のものではなかった。落葉宮は感傷的であるが、作者は感傷に溺れていない。朱雀院が、宮と夕霧の関係を心づきなしと想っている。作者は宮の再婚をたたえているのではない。内親王不再嫁の掟の前に、落葉宮の探った道は正当だと云えないのだ。だが罪は宮にあるのではない。宮は仕方なかったのだ。同時に、若し夕霧の一念な求愛という苦難に出会わなければ決して現れることのなかった宮の心の美しさ、けなげさが、きらめき出たのである。それは定子についても同様であり、夕霧の巻の落葉宮創造の狙いはそこを描くのにあったと思われる。

(四)

落葉宮を朱雀院に審判させた作者は、夕霧を光る源氏の批判に委ねる。源氏が夕霧の巻で顔を見せる所は次の三個所である。

- (1) 六条の院にもきこしめして、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人のそしりどころなく、めやすくて過したまふを、おも立たしう、わがいにしへ少しあざればみ、仇なる名を取りたまう

し面おこしに、うれしう思しわたるを、いとほしういづかたにも心苦しき事のあるべきこと、さし離れたるなからひにてだにあらで、大臣などもいかに思ひ給はむ、さばかりの事たどらぬにはあらじ、すぐせといふものがれわびぬる事なり、ともかくも口入るべき事ならずと思す。女のためのみにこそいづかたにもいとほしければ、あいなく聞召し歎く。

源氏は、夕霧が、柏木の死後その未亡人落葉宮の許に通うという風評、物語のこの時点ではまだ二人の間には何事も生じていないのだが――を耳にして、わが子夕霧よりも、一人の男を争うことになった二人の女性、夕霧の妻雲井雁と落葉宮とのためにその不幸を歎かずに居られない。二人は故人柏木の実妹と未亡人という近親の間柄なのである。然し源氏は反対だが口出しすべきでないと思う。

(2) かばかりのすくやか心に、思ひそめてむこと、いさめむにかなはじ、用ゐざらむものから、われさかしに言出でむもあいなし、と思して止みぬ。

対面の機会に源氏は落葉宮を話題にするが、夕霧が話を外らしてしまうので、この思いつめた一途の恋に第三者の介入は不可能だと悟る。

やがて、夕霧は宮の如何なる拒否にもめげず、内親王不再嫁の伝統を踏み超えて結婚しようと決意し、宮の邸の一条宮を修理して強引に宮を小野からひき移し、自身もそこに居据ってしまふ。源氏はその噂を聞き知る。

(3) 御前に参りたまへれば、かの事は聞し召したれど、何かは聞き

顔にもと思いて、たゞうちまもり給へるに、いとめでたく清らに、この頃こそねびまきり給へる御さかりなめれ、さるさまのすぎごとをしたまふとも、人のもどくべきさまもし給はず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにもの清げに、若うさかりにほひを散らし給へり、物思ひ知らぬ若人の程にはたおはせず、かたはなるところなうねび整ほり給へる、ことわりぞかし、女にてなどかめでざらむ、鏡を見てなどかおごらざらむ、と、わが御子ながらも思す。

宮の拒否は続いているのだが源氏はそこまでは知らない。黙って夕霧の顔を見つめていると全く美しく立派である。源氏はわが子の恋を許す気になる。

源氏の夕霧に対する姿勢は、伝統を尊重する兄朱雀院と全く対蹠的である。彼は夕霧が二人の妻を持つ結果を考えて、この恋に賛成出来ないと思っていたが、それは制度や伝統とは無関係な思考である。夕霧のために、女が二人ここで不幸を招き寄せることになるのを気の毒に思う同情心から発した意向である。やがて、ひたむきな夕霧を見ると傍から容喙すべきでないと思い、最後には美的当然として容認してしまふ。

世間は早くから夕霧と宮との間を噂に上せ、その結合が成立しているものと誤認していた。口善悪ない世評が当然想像されるのであるが、物語にはその内容は記されていない。作者が筆をわざと省いたのである。作者にあっては、宮の側に朱雀院の批判、夕霧の側に源氏の審判それだけが必要としたのである。

夕霧と落葉宮との結婚の顚末は、「光る源氏の物語」の上から見れば一挿話に過ぎない。夕霧の巻一卷を欠除しても、源氏物語は成立する。夕霧の巻は、光源氏の生涯の終幕を飾る鈴虫・御法両巻の間に介在して、物語の進行の流れに不連続であり、異質的できさある。だが夕霧の巻の側から云えば、光る源氏の生涯の一件として組み入れられる必要があるのだ。夕霧と落葉宮との皇室の掟を破った結婚に対する審判は、源氏その人の美的權威によって下されねばならなかった。そのために、夕霧の巻は、源氏の子孫の動静を描いた光る源氏後日譚としてでなく、その輝やかしき良き生涯の中の一件として設定されたのである。源氏の下した審判は上に見た通りである。すなわち、女の側についてはあはれという外なく、男の側については、たとえ賛成出来ない理由があっても、一途の恋に第三者が容喙しても仕方がないと見、最終的には、その行為がたとえ道徳を超え制度を超えたとしても、人間の美的必然を認めない訳には行かないではないかという美的容認が、結論として与えられる。ここで考えられることは落葉宮が定子の香を帯びていることから、自然とこの源氏の夕霧批判が一条帝に関連を持つ結果になることである。勿論作者は夕霧に一条帝を映してはいない。然し、夕霧の巻が遠くから、一条帝の名譽を宮廷社会の陰口から解き放つことに手を借したことになるのを見落せない。そして当然その点をも、この明敏な作者は計算の中に含めていたと思われる。

(五)

夕霧の巻と手習の巻との間に連関の存在することは、これまでも指摘されている。それは両巻が小野の里を背景として共通に持つこと、風物の描き方に似通ったところが多いこと。また、作者自ら手習の巻に「かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは今すこし入りと」と特書き記していることなどが注目されて来たのであるが、私は両巻の間に内容上の連関を認めるものである。作者は夕霧の巻を読者に想い起させる必要があって、わざわざ浮舟の居処を「かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは今すこし入りと、山にかけたる家なれば、松蔭しげく、風の音もいと心細きに、つれづれと行ひをのみしつ、いつともなくしめやかなり。」と書き起したのである。定子皇后還俗事件は、政争の要素を除けば、人間的な愛と尼僧の掟との相剋の場で愛が最後に押し勝ったものと見ることが出来る。夕霧の巻は愛と皇族の掟との相剋を主題に取り上げ、夕霧を愛の側に落葉宮を掟の側に配している。両者は平行線の対峙を続けるが、夕霧は判断・工夫・努力・機智などを以って、種々の困難を自力で排除して遂に宮を手に入れ、愛が圧勝する。恋物語でありながら男君と女君の間の愛の心理や感覚の交流が描かれず、難題智譚風に仕組まれて居るので、筋の進行の間に和哥的なまた絵巻物的な情景が糾い交ぜられているにも拘らず散文的印象が強く、また、夕霧の行動性が他の巻に登場する彼の性格や振舞いとは異質の感じを残すのであるが、抒情性を損ねてまで、主題に対して作家的体当りが

試みられている点に注目したい。一方、手習・夢浮橋の両巻は、夕霧の巻の主題と同じ愛と掟の相剋の問題に最終的に集約されて行くのであるが、女主人公が自己の内部に於いて、宗教的の面でも、愛の心理や感覚の面でも心的体験を重ねる過程が描かれ、小野の里の風物がそれに絡み合って景情共に頗る抒情的である。定子皇后の残して逝った愛と掟の相剋の問題を再び取り上げた作者は、夕霧の巻でし残した仕事を、云うならば、浮舟において完成しようとしたものかと私には思われる。

浮舟は東国育ちの娘である。内親王落葉宮や皇后定子を偲ばせる何物をも持たない。然し作者は、浮舟の尼院生活に夕霧の巻の小野の山荘の落葉宮を読者が想起することを期待した。事実、浮舟の尼生活には、後見のない若い女の結婚拒否が問題として引継がれている。しかも夫に無断で出家した女が夫から復縁を要求される場合、女は還俗せねばならないのだろうか。それは本当はどうあるべきなのだろうと、作者は、夕霧の巻の主題よりも一步深く突込んで、問題を提起してくる。定子皇后還俗事件とは遙かに遠い舞台で問題が採り上げられたところに、この虚構文学の構成上の工夫が存在するのであろう。皇后・内親王という特殊の場合を避けたために、却って問題の核心を強調し得るのだ。この解決に、浮舟は勿論女主人公であるが、横川の僧都が大きな役割を担って参与するのではあるまいか。僧都の学識信仰備った聖僧であること、世間の毀譽褒貶に頓着しないで、広い人間的見地から大胆な実行力を発揮し得る判断力を有つこと、これらの人格的要素は、人間的な愛と出家者の掟との

相剋の物語の解決者としての資格のために、作者が付与したものと見ることも出来るではないか。夕霧と落葉宮の結婚に、光る源氏という絶対的權威が結論を示したと同様に、作者は浮舟物語の結末に對つて、間然するところなき横川の僧都という權威を準備したのではなからうか。

(六)

以上の小論に於いて、私は夕霧の巻の制作と、定子皇后の還俗事件との間に関連があることを見出し、さらに、この新たな視点から夕霧の巻を眺めることによって、従来この巻に於て問題とされてきた点の幾つかを、解明し得るのを知ったことを報告し、大方のご叱正を願うものである。